

平成21年度沖縄群島病害虫発生予報第11号(2月予報)

2月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	気 温	降 水 量	日 照 時 間
高い(多い)	60	40	20
平 年 並	30	40	40
低い(少ない)	10	20	40

(平成22年1月22日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

地点別の平年値

	平均気温()	最高気温()	最低気温()	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	16.6	19.2	14.3	125.2	84.6

(沖縄気象台発表・統計期間1971～2000・資料年数30年)

2月の発生予報および防除上の注意事項

1 マンゴー

出蕾・開花期の病害虫防除対策

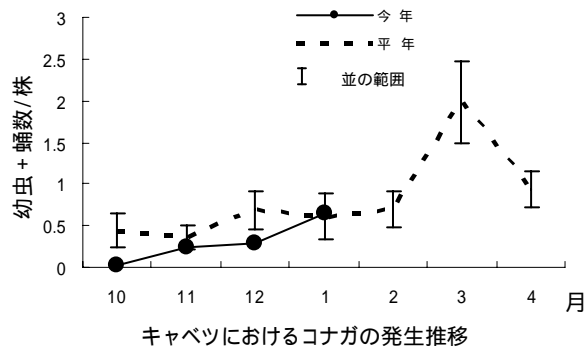
- a 出蕾を確認した後、炭疽病予防のためビニール被覆を行う。
- b 罹病した枝、葉は速やかに施設外に持ち出し処分する。
- c 混合花の新葉や不要な新梢はチャノキイロアザミウマの発生源になることから除去する。
- d 病害虫の発生源となる施設内外の雑草を除去するとともに、ハウス内の通気性を良くする。
- e ビニール被覆後および受粉昆虫放飼前の薬剤防除を徹底する。

2 キャベツ

(1) コナガ

発生程度 : 並
予報の根拠

- a 1月下旬の調査の結果、株当たり幼虫・蛹数は0.6頭(前年0.1頭、平年0.6頭)と平年並であった。
- b 気象予報によると向こう1か月の気温は平年より高い確率が60%と予想されており、本種の発生は助長されやすい。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 圃場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残渣処理を徹底し圃場衛生に努める。
- b 薬剤散布は低密度時が効果的であるので、多発する前に散布を行う。
- c 薬剤抵抗性を発達させすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

3 トマト

トマト黄化葉巻病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、本島南部の一部施設で本病の多発生が見られた。
- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封処分する。
- 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、タバココナジラミの侵入を防止する。
- 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

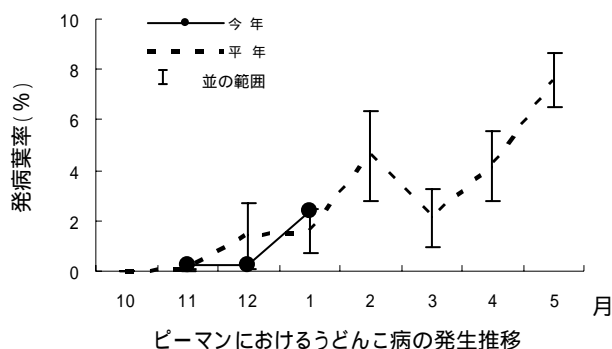
うどんこ病の防除対策

- 1月下旬の調査の結果、発病葉率は0.5% (前年0.4%、平年1.7%)と平年よりやや低かった。
- 通風が悪いときに多発しやすいので、老葉や病葉を除去し、透光通風を良くする。
- 今後発生が増加すると考えられるので初期防除を徹底する。
- 多発すると防除が困難となるので、葉をよく観察し早期発見・早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 ピーマン

- (1) うどんこ病
発生程度 : 並
予報の根拠

1月下旬の調査の結果、発病葉率は2.4% (前年2.5%、平年1.6%)と平年並であった。

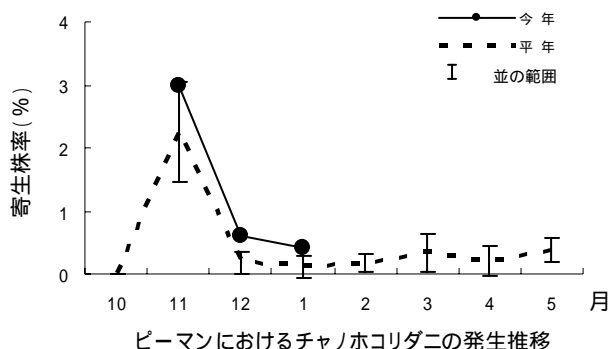


< 防除上注意すべき事項 >

- 通風が悪いときに多発生しやすいので、老葉や病葉を除去し、透光通風を良くする。
- 今後発生が増加すると考えられるので初期防除を徹底する。
- 多発すると防除が困難となるので、葉をよく観察し早期発見・早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2) チャノホコリダニ
発生程度 : やや多
予報の根拠

- a 1月下旬の調査の結果、寄生株率は0.4%(前年1.0%、平年0.1%)と平年よりやや多かった。
b 気象予報によると、向こう1か月の平均気温は平年より高い確率が60%の見込みで、本種の発生が助長されやすい。



< 防除上注意すべき事項 >

- a 摘葉等の残渣は、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
b 増殖が速く、多発すると防除が困難になるので早期発見・早期防除に努める。
c 芯葉部や果実のへたなど薬剤がかかりにくい場所に寄生するので、散布むらのないよう丁寧に散布する。

5 さやいんげん(平張り)

菌核病の防除対策

- a 1月下旬の調査の結果、発病株率は0.2%(前年0.8%、平年1.0%)と平年並であった。
b 気象予報によると、向こう1か月の降水量は高い確率が40%、日照時間は少ない確率が40%の見込みで、本病の発生が助長されやすい。
c 発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどして圃場外へ持ち出し処分する。
d 多湿時に発生しやすいので、老葉病葉は取り除き透光通風を良くする。
e 例年発生時期に当たるので、予防防除に努める。

6 小ギク(彼岸出荷用)

アザミウマ類の防除対策

- a 1月の調査の結果、10茎当たり成虫数は0.5頭(前年0.4頭)、被害葉率は3.5%(前年0.4%)、被害圃場率は38.9%(前年21.7%)であった。また、一部圃場で多発生が見られた。
b 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高い確率が60%と予想されており、発生が助長されやすい。
c 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
d 葉裏の観察や虫見板の利用等により早期発見し、早期防除に努める。
e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

アブラムシ類の防除対策

- a 1月の調査の結果、10茎当たり虫数は9.3頭(前年20.4頭)、発生圃場率は50.0%(前年82.6%)であった。
b 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高い確率が60%と予想されており、発生が助長されやすい。
c 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
d 発生初期の防除を徹底し、薬剤は芯葉部や葉裏に十分かかるように散布する。
e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。